2026 年 3 月発行

一般社団法人アスリートケア News Letter Vol.64

Beside Athletes

事務局：大阪保健医療大学保健医療学部リハビリテーション学科内　　発行責任者：境　隆弘

〒530-0043 大阪市北区天満 1 丁目 9 番 27 号 TEL：090-2386-5352（研究会専用） FAX：06-6352-5995（大阪保健医療大学）

http://www.athlete-care.jp/

—Information—

2026 年の幕開けから「冬季オリンピック」「Word Baseball Classic」とスポーツ界が盛り上がっており、いよいよ『第 98 回選抜高等学校野球大会』も始まりましたが、今号は昨年を振り返る号になります（尚、活動は一昨年でしたが、昨年号の Vol.63 に未掲載だった『第 106 回全国高等学校野球選手権大会における健康支援報告』から今号に掲載しております）。

一般社団法人アスリートケア　事務局

第 106 回全国高等学校野球選手権大会における健康支援報告

埼玉医科大学かわごえクリニック　　名塚健史

【はじめに】

第 106 回全国高等学校選手権大会の健康支援活動は、大会前甲子園練習が再開となり 8 月 2 日（金）～8 月 4 日（日）の 3 日間、大会は 8 月 7 日（水）～8 月 23 日（金）の 17 日間（予備日含む）で行われました。雨等による中断はありましたが順延は 1 日もなくほぼ日程通り開催されました。決勝戦は初のタイブレークとなり、京都代表の京都国際が延長 10 回の末 2-1 で東東京代表の関東第一を下し初優勝となりました。今大会では暑さ対策の一環として、大会第 1 日から第 3 日の試合数を 1 日 3 試合とし、午前中と夕方に分けて試合を行う「2 部制」が試験的に導入されました。また選抜大会に引き続き選手権大会も 2019 年以来クーリングダウンが再開、実施されました。

【サポート内容】

健康支援の参加者は大会前練習で 18 名、甲子園大会中で延べ 175 名でした。処置の件数は大会前練習では 3 件、大会中は 128 件で、昨年よりも 30 件ほど増えました。処置内容においては、例年同様、テーピングやアイシング、ストレッチの実施が中心でした。これは、試合前処置としてのテーピング、試合中、試合後の打撲に対するアイシングとテーピングを用いた応急処置、熱中症に対するクーリング、ストレッチが多く実施されました。

【熱中症予防の取組み】

昨年からクーリングタイムが導入され、5 回終了時、涼しい場所を提供し、アイススラリー・ドリンクの摂取、氷嚢・ネッククーラーの活用などで水分補給、身体の冷却、休息をとれるよう行いました。さらに今年から大会 1 日目から 3 日目まで昼の暑さのピークとなる時間帯を避ける「2 部制」が導入されました。また早朝の起床に伴う朝食の摂取不足による熱中症発症の恐れがあるとのことで第 1 試合前に選手への補食（パン・ゼリーなど）が大会本部から準備されました。

【処置について】

＜大会中処置＞　※ 健康支援チェックシート、iPad の記録より

処置件数　131 件（うち 6 件は審判対応）※昨年 98 件

部位別　上肢　29 件　下肢　83 件　体幹　3 件　頭頸部　4 件　その他（発熱）10 件

熱中症の対応ため下肢症状が多かったと考えられる

＜頭部外傷＞

頭部外傷：4 名

→ 打撃投手 1 件　守備選手同士交錯プレーでのアクシデント 1 件、

送球が頸部に当たる 1 件　打球が当たる 1 件

＜処置の種類＞

アイシング	73
テーピング	41
水分補給	61
ストレッチ	55
その他	32

【投手の疲労について】

投手の疲労部位の傾向は例年と変わりない状況でした（図 1）。大会ルールの変更（1 週間での投球総数の制限）に伴い、投手の継投起用が増え、一人あたりの投球数が減少し（図 2）、疲労部位無しの割合が増大したと考えられます。

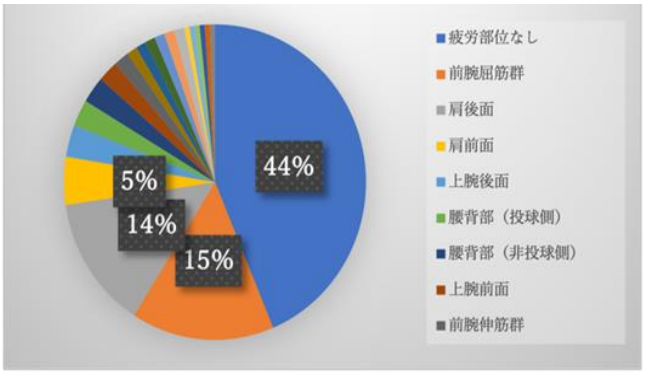


図 1．疲労部位

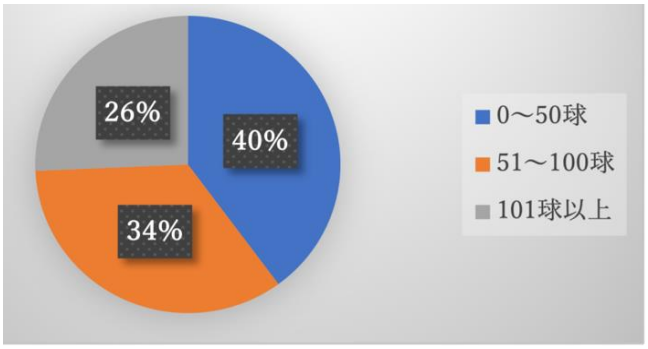


図2．投手 1 人当たりの投球数

【熱中症様症状の件数】

熱中症様症状を訴える選手は、総件数 64 件、医師の診察は 10 件ありました。昨年の 40 件よりも 24 件増える結果となりました。しかし、発生時期を詳細にみていくとクーリングダウン中に 26 件発生しており、総件数からダウン中の発生件数を差し引くと、試合中は 38 件となり、今年は猛暑でありましたがクーリングタイムの効果もあってか試合中の件数が増えることはありませんでした（図 3）。

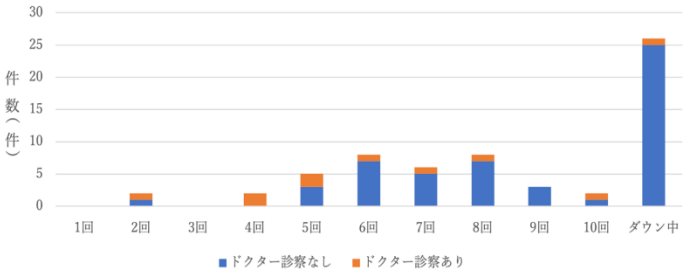


図2．熱中症様症状の件数

【おわりに】

今大会も健康支援事業に参加していただいた会員の皆様のご協力、また主催者である日本高等学校連盟のご理解のもと、大きな問題なく無事に大会の業務を終えることができ、皆様に深くお礼申し上げます。年々暑さが増す環境の変化の中、また暑さ対策がメディアでとり上げられ注目される中、二部制やクーリングタイムなどさまざまな新しい取り組みが行われています。この変化に対応し、よりよい健康支援活動がこの先も継続できるよう、今後も皆様のご協力よろしくお願いいたします。

第 97 回選抜高等学校野球大会健康支援報告

甲子園サポート部　椎葉　恵

【はじめに】

今大会の健康支援活動は、2025 年 3 月 13 日（木）～14 日（金）の 2 日間に大会前練習、3 月 18 日（火）～3 月 30 日（日）の 13 日間に本大会（準々決勝、準決勝後の休養日を含む）が実施されました。順延はなく、日程通り開催されました。健康支援事業の参加者は大会前練習が 10 名、大会中で延べ 192 名（実参加延べ 146 名）でした。

【健康支援内容】

今大会における健康支援事業の処置件数は、大会前練習では 1 件、大会中では 100 件（選手：96 件、審判委員：1 件、開会式学生：3 件）でした。処置内容は、例年同様、テーピングやアイシング、ストレッチ、創処置の実施が中心でした（表 1、2）。受傷部位では、上肢への処置が最も多い結果となりました。頭頚部受傷への対応が 2 件あり、1 件はバックボードを使用して搬送されました。また、もう 1 件は大会役員から嘱託医に診察を依頼するも対応されないことがありました。健康支援スタッフが状況確認・経過観察、大会役員への報告を実施し、その後症状の悪化などはありませんでした。

以下に健康支援事業内容の詳細について報告いたします。

表1 処置内容と受傷部位

処置内容	(件)	部位別件数	(件)
テーピング	30	上肢	42
アイシング	29	下肢	33
ストレッチング	16	体幹	8
水分補給	16	頭頚部	2
創処置	13	その他	5
その他	11		

□試合前処置：18 件

事前に各出場校へアンケート（大会前アンケート・試合前アンケート）を配布し、回収しました。試合前処置の内容は、テーピング処置を希望する選手が多くみられました。短時間で症状の把握、選手の要望、評価、テーピングの貼付、効果の確認を実施する必要があり、知識や技術の重要性を再認識しました。また、勝利チームに対しては試合後にテーピングの効果などの確認を行い、次回の試合前処置の際にスムーズな処置が行えるようスタッフへの申し送りを行いました。

□試合中処置：47 件

試合中では、デッドボールや走塁、守備中に生じた打撲や擦過傷に対するアイシングやテーピングを用いた圧迫処置、創処置や熱中症様症状に対するアイシングや水分補給などの処置も多くみられました。近年、選手や学校関係者から攣り感などの症状の訴えを申告される事例も増えてきており、熱中症様症状に対する意識が高まっていることを感じました。頭頚部外傷は 2 件ありました。1 件は球場職員によってバックボードを使用し搬送されました。また、もう 1 件は大会役員から嘱託医に診察を依頼するも対応されないことがありました。健康支援スタッフが状況確認・経過観察、大会役員への報告を実施し、その後症状の悪化などの大事には至りませんでした。熱中症様症状や頭頚部外傷の対応方法については、今後も合同勉強会やワークショップ、研修会を通して健康支援スタッフの知識、技術の習得の重要性を感じました。

表 2　処置時期

処置時期	（件）
大会前練習	1
試合前	18
試合中	47
試合後	31

□試合後処置：31 件

試合後の処置は、試合中のデッドボールなどのアクシデントによって生じた打撲や擦過傷に対するアイシングと圧迫処置や創処置が多くみられました。また、試合後に気分不良を訴える選手もみられ、熱中症様症状を有する選手に対して水分補給、ストレッチングなどで対応しました。このように、試合後に症状を訴える選手も少なからず発生するため、注意深い観察や積極的な声掛けなどの必要性を感じました。

□熱中症様症状：18 件（医師の診察：0 件）

今大会における熱中症様症状の総件数は 18 件、その内医師の診察を要したのは 0 件であり、昨年の 23 件より減少しました。発生時期は例年通り、1 回戦に発生することが多くみられました。各出場校へのアンケート聴取による体調面の把握、試合前処置時の熱中症様症状に対する声掛け、試合前や試合中のアイススラリーなどの水分補給により、熱中症様症状の重篤化を防ぐことができたと考えられます。また、健康支援スタッフによる選手の観察、選手や学校関係者より攣り感などの申告も近年増えてきていることから軽症のうちに対応することができたと考えられます。今後も、熱中症様症状の予防や重篤化の予防のための対策を検討し、啓蒙していくことが重要だと感じました。

【おわりに】

今大会も健康支援事業に参加いただいたスタッフの皆さまのご協力のもと、滞りなく業務を終えることができました。頭頚部外傷や熱中症様症状などの試合中に発生するアクシデントだけでなく、試合前後の対応など臨機応変に行動することが大切だと改めて感じました。健康支援事業では、さまざまな知識や技術だけでなく、大会役員や健康支援スタッフ同士の連携も重要であることを再認識しました。合同勉強会やワークショップ、研修会を通して、知識や技術のアップデートしていく必要性があります。今後も、選手が安全に安心してプレーできるようより良い健康支援を実施するために尽力いたします。

健康支援事業の参加スタッフのお陰をもちまして今大会も無事に終えることができましたことを心より感謝申し上げます。

第 107 回全国高等学校野球選手権大会健康支援報告

大阪電気通信大学　健康情報学部　理学療法専攻　　成 俊弼

【はじめに】

今大会の健康支援活動は、大会前の甲子園練習が令和 7 年 7 月 31 日（木）～8 月 3 日（日）に実施され、大会は 8 月 5 日（火）から 8 月 23 日（土）までの 19 日間開催されました。8 月 10 日（大会第 6 日目）は天候不良により全試合が中止・順延となりましたが、大会はおおむね予定通り進行しました。決勝戦は 8 月 23 日に行われ、沖縄代表の沖縄尚学が西東京代表の日大三を 3－1 で下し、初優勝を果たしました。今大会では暑さ対策の一環として、昨年、試験的に導入された午前の時間帯と夕方以降に分けて試合を行う「2 部制」が第 1 日～第 6 日までに拡大して実施されました。また、選抜大会に引き続き選手権大会でも試合後のクーリングダウンが継続実施されました。さらに新たな取り組みとして、試合前の守備練習（ノック）を行うかどうかを各チームの判断に委ねる選択制も導入されました。

健康支援活動への参加者は大会前練習で 16 名、大会期間中で延べ 185 名でした。また、大会参加選手に対し、試合前処置、熱中症対策・試合中のアクシデント対応、投手のアイシング・大会中投手検診・試合後のクーリングダウンなどを実施しましたので、以下に報告します。

【熱中症の件数】

熱中症様症状を訴える選手は、総件数 75 件（軽症：51 件、Ⅰ度：24 件）、そのなかで医師の診察は 13 件であり、1 件は車椅子で救護室に移送後、点滴加療となりました（図 1）。また、昨年の 64 件よりも 11 件増大しました。

発生時期の比較では、軽症・Ⅰ度症状ともに 7 回以降とクーリングダウン（CD）での発生割合が高い傾向となりました（図 1 a　,b）。

今大会は熱中症様症状の件数が増大したため、今後も引き続き熱中症予防や重篤化の予防のために対策を考えていくことが重要だと感じました。

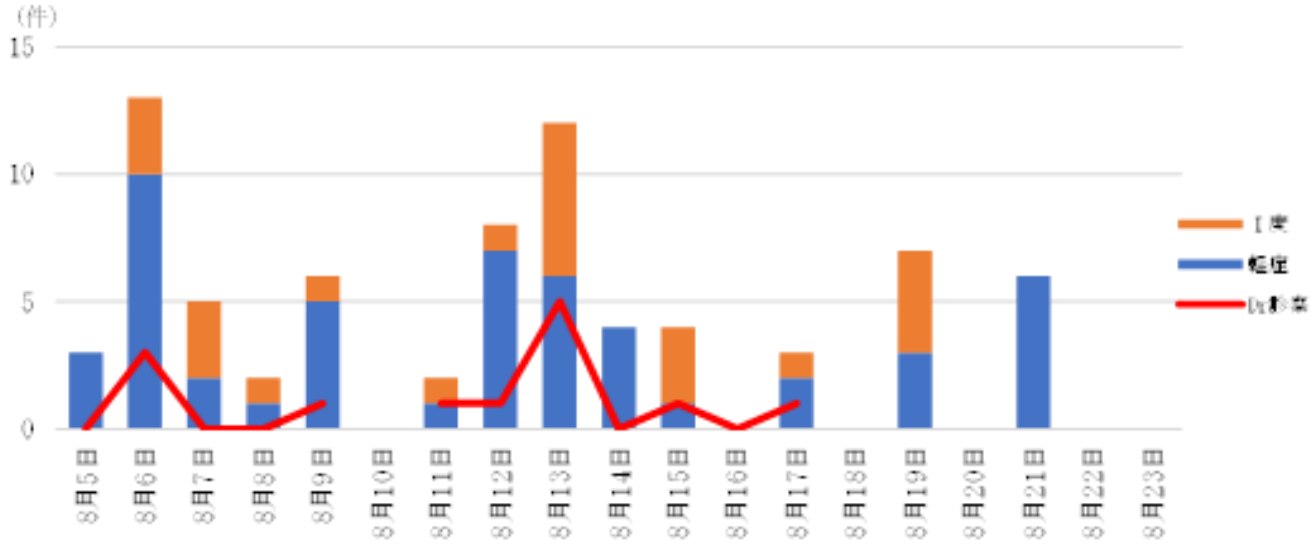
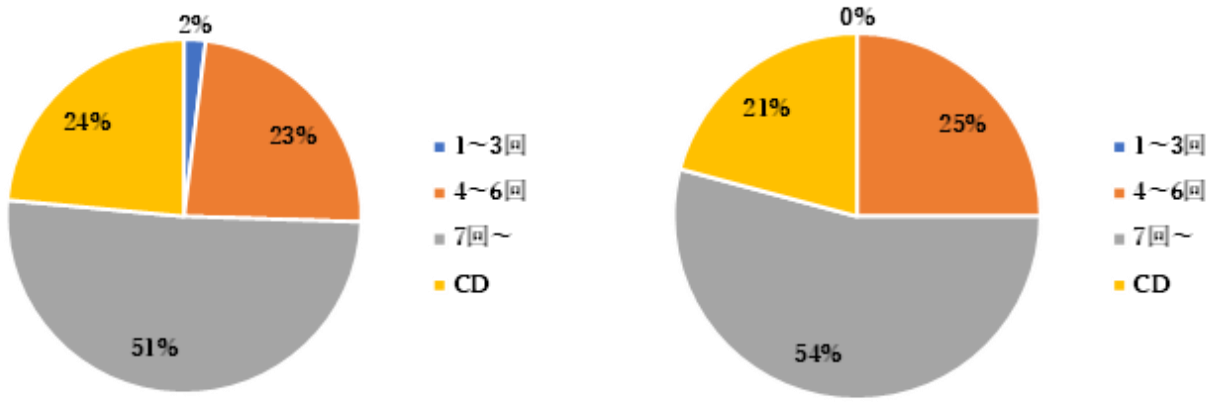


図 1. 発生件数と医師診察件数



a. 軽症　　b. Ⅰ度

図 2. 各試合における熱中症発生時期の比較

【熱中症予防に対する取組み】

昨年同様に試合前アンケートを実施することにより選手の体調面を確認し、サポートスタッフで情報を共有しました。大会を通して、スタッフの熱中症様症状に対する意識が高く、軽症でも多くの選手に目を配ることができ、発症した選手に迅速に対応できたと思われます。

試合中では 5 回終了時のクーリングタイムで、ベンチ裏の冷房の効いたスペースでアイススラリーやスポーツドリンク等の飲料を摂取し、氷嚢やネッククーラーの活用などによって水分補給・身体冷却・休息を取れるようにしました。また、アンダーシャツだけでなくユニフォームも着替えられる体制としています。さらに今大会では、「2 部制」が第 1 日から第 6 日まで試合日程に組み入れられ、午前の時間帯と夕方以降に試合開始時間が分けられました。早朝からの試合準備による朝食不足が熱中症発症リスクになることを踏まえ、昨年に引き続き大会本部が選手到着後に補食を準備しました。昨年（第 106 回大会）は第 1 試合前におにぎりとパン、第 2 試合前にパンを提供していましたが、代表校へのアンケートで好評だったことから、今大会では全試合を対象におにぎり、パン、ゼリータイプの栄養食品、100%果汁ジュースを提供しました。さらに選手の負担軽減策として、第 107 回大会から試合前ノックの時間を 7 分から 5 分に短縮し、ノック自体を実施するかしないかをチームが選択できるようにしました。これらの取り組みにより、猛暑下での熱中症予防に万全を期しました。

【健康支援内容】

今大会の処置の件数は大会前練習では 8 件、大会中は 143 件（うち 6 件は審判対応）で、昨年の 131 件よりも約 12 件の増加となりました。受傷部位では、昨年と同様に下肢の件数が最も多い結果になり、これは熱中症様症状に対する対応ため下肢症状が多かったと考えられます（表 1）。また今大会では、頭頚部受傷への対応が 2 件と昨年より 2 件減少しました。

処置内容では、例年同様テーピングやアイシングの件数が多い結果となりました（表 1）。受傷時期では例年同様に「試合中」の受傷が多く、受傷場面では「その他・不明」が最も多く、これは熱中症様症状に対する処置によるものと考えられます。また、守備中や打撃中の受傷が多い結果にもなりました。守備中は打球を処理する際の打撲、打撃中はデッドボールでの受傷によるものでした（表 2）

表1. 受傷部位と処置内容

部位別件数(件)		処置内容(件)	
上肢	58	テーピング	72
下肢	108	アイシング	79
体幹	8	ストレッチ	62
頭頸部	3	水分補給	61
その他(発熱)	16	その他	20
その他	4		

表2. 受傷時期と受傷場面

受傷時期(件)		受傷場面(件)		処置時期(件)	
大会前	45	守備中	42	試合前	42
大会練習中	8	打撃中	34	試合中	79
大会試合中	112	走塁中	11	試合後	48
その他・不明	23	投球中	14		
		その他・不明	79		

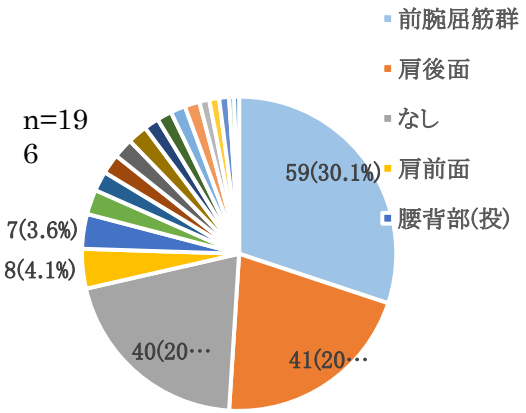


図 3. 登板投手における試合後の疲労部位

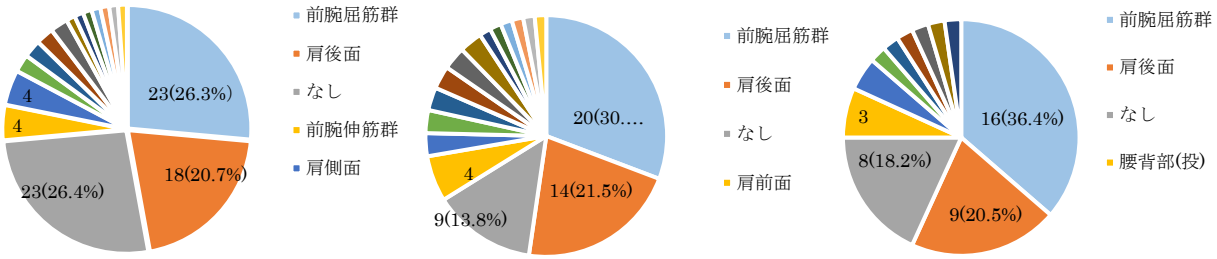
表3. 1投手当たりの投球数

投球数	投手数	割合
0～50球	87名	44.4%
51球～100球	65名	33.2%
101球以上	44名	22.4%

【登板投手における試合後の疲労部位】

登板投手における疲労部位の集計結果は、延べ196件でした。内訳は、前腕屈筋群（30.1%、59件）の訴えが最も多く、次に肩後面（20.9%、41 件）、疲労部位なし（20.4%、40件）となりました（図3）。この傾向はコロナ禍前、コロナ禍中と同様の結果となりました。また，延べ196件の投球数別の内訳は、101 球以上の投手は 22.4%で、50 球以下の投手が40%以上を占めていました（表3）。投球数別の疲労部位では、50球以下の投手は疲労部位なしの割合が多くなっていました。しかし、投球数にかかわらず、前腕屈筋群、肩後面の訴えが多い結果でした。

2 試合以上で 100 球以上投げた選手は 11 名であり、多くの選手は試合を重ねる毎に疲労部位が増えていました。今大会では、最大4試合で投球数が100球を超える選手もいました。



(a). 0～50 球

図 4. 投球数別の疲労部

【おわりに】

今大会も健康支援事業にご参加いただいた会員の皆様のご協力と、大会主催者である日本高等学校野球連盟のご理解のもと、大きな問題もなく無事に大会業務を終えることができました。心より感謝申し上げます。年々厳しさを増す暑さの中、メディアでも暑さ対策が取り上げられ注目されるようになっており、今大会でも 2 部制の拡大やクーリングタイムの実施、試合前ノックの選択制導入など新たな取り組みが行われました。私たちはこれら環境の変化に対応し、より良い健康支援活動を今後も継続できるように、ワークショップや研修会などを通じて、スキルアップをしていくことが望まれます。引き続き皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

第 32 回 WBSC U-18 野球世界大会 日本代表チーム帯同報告

専門学校　健祥会学園　松浦　康
のがみ泉州リハビリテーションクリニック　森岡　俊行

【はじめに】

第 32 回 WBSC U-18 野球ワールドカップが沖縄にて開催され、侍ＪＡＰＡＮU-18 日本代表帯同理学療法士として活動させていただきました。大会に先立ち U-18 日本代表候補者強化合宿として大阪で 2025 年 4 月 3 日～4 月 5 日の 3 日間、今大会は開催国が日本の為、開催地の沖縄で 2025 年 8 月 28 日～9 月 3 日の 7 日間の国内合宿を実施後、10 日間の世界大会が開催されました。今回、国内合宿から大会終了までの活動報告をさせていただきます。

【U-18 日本代表候補者強化合宿】

春の選抜大会後 U-18 日本代表候補者強化合宿が開催されており、内容は合同練習と座学になっています。合同練習では、木製バットへの対応、自チーム以外のポジションでの守備練習、投手の牽制に加え、スイングスピードの計測、弾道測定器ラプソードによる球速、回転数、回転軸などの計測が実施されました。座学では、国際ルール解説、高校野球監督からの日本代表に求められるものの説明、医師からのアンチドーピングについて講義がありました。理学療法士の業務としては、選手全員のウォーミングアップ、投手・野手へのアイシング、投手個別のトレーニング、クーリングダウン、アクシデントに対する応急処置、練習前・中のテーピング処置、野手全体へのクーリングダウン等を実施し、世界大会へ向け業務内容の確認ができる貴重な合宿でした。（図１，２）



図１.ウォーミングアップ風景



図２.クーリングダウン風景

【U18 日本代表チームのメディカルスタッフ】

今大会における U-18 日本代表チームのメディカルスタッフは、医師１名、理学療法士２名でした。それぞれの役割を理解し、相談・連携しながら活動することができました。なお、沖縄での合宿前には、過去の WBSC U-18 世界大会、BFA U18 アジア選手権に帯同した医師と理学療法士からの引き継ぎと帯同における貴重な情報共有の機会があり、準備物の確認や心構えが出来ました。

【U-18 高校日本代表合宿スケジュール】

8 月 27 日 スタッフ集合・スタッフミーティング
8 月 28 日 集合・練習・チームについての説明
8 月 29 日練習試合（沖縄電力）
　医師・沖縄スタッフによるメディカルチェック、アンチドーピング講習
8 月 30 日 NPB 振興室「普及・振興イベント」・全体練習（糸満西崎球場）・結団式
8 月 31 日 壮行試合（大学日本代表）
9 月 1 日 練習（セルラースタジアム那覇）
9 月 2 日 壮行試合（沖縄県高校選抜）
9 月 3 日 練習（セルラースタジアム那覇）

【第 32 回 WBSC U-18 野球ワールドカップ】
9 月 4 日 公式練習
第 32 回 WBSC U-18 野球世界大会開幕
9 月 5 日～9 月 9 日 オープニングラウンド
9 月 10 日予備日
9 月 11 日 ～13 日 スーパーラウンド
9 月 14 日 ファイナルラウンド

【大会前合宿スタッフ】

大会前合宿は世界大会が行われる沖縄県で実施されました。合宿に参加する理学療法士は期間を通して帯同している 2 名以外にサポートスタッフとして関西・沖縄から 1 日 1 ～ 3 名参加し、合計で 1 日 3 ～ 5 名体制で 7 日間実施しました。いずれの日においても、関西・沖縄から参加したスタッフのお蔭で、限られた時間・期間内にもかかわらず、多くの選手にコンディショニングを実施でき、帯同理学療法士が選手のコンディションの状態について十分に把握することができました。国際大会の帯同経験があるサポートスタッフも参加しており、世界大会の帯同に向けて様々な助言を得ることが出来ました。

【メディカルチェック】

合宿期間中に侍ジャパンの各カテゴリーで実施されているメディカルチェックが実施されました。内容は、全日本野球協会関係の医師 3 名によるエコー検査、沖縄県理学療法士会から参加の理学療法士 4 名による上下肢の関節可動域測定を実施しました。大きな問題を有している選手はおらず、検診医師が選手自身、首脳陣、帯同理学療法士に総合評価を伝え、そのデータが帯同医師に報告されました。選手全員の問診、現在の怪我の状況、テーピングの必要性、内服薬、食物等アレルギー、精神状況などを把握され、関節可動域などの機能評価は理学療法士で行い、それぞれの情報を共有することが出来ました。

【理学療法士業務内容】

業務内容は国内合宿、世界大会帯同ともに、朝食前の体重管理、疲労度、睡眠時間の聴取による体調管理、練習・試合前のコンディショニング、試合前・中のテーピング(図 3)、試合前のウォーミングアップ、練習や試合中におけるアクシデントへの対応(図 4)、投手や負傷者のアイシング、全体クーリングダウン(図 5)、個別クーリングダウン、宿舎でのコンディショニング（図 6）を中心に行いました。また、合宿期間中・大会期間中を通して朝の散歩と体操を実施しました。（図 7 、 8）



図 3.コンディショニング、テーピング



図 4.アクシデント対応



図 5.投手のクーリングダウン



図６．全体のコンディショニング



図７.朝の散歩



図８.朝の体操

【アクシデント対応】

前回大会と同様に、試合中のベンチ内には医師と理学療法士１名の２名、ベンチ裏に理学療法士１名という布陣で対応しました。(図９、10) 打撲などの外傷があった際は、球場での診断・処置、場合によってはエコーにてチェックを行い、対応方法を指示していただくことでアクシデント対応がスムーズになり、理学療法士の業務が円滑に進めることができました。合宿中靴擦れが出来た選手が数名出ましたが、医師の指示のもと創処置を行いました。早期対応が出来たことにより、世界大会開始時には、プレーに影響がない状態まで回復することが出来ました。(図 11，12) また、合宿期間中に腰痛のため病院を受診した選手がいましたが、早期対応が行え、問題無く大会に参加できております。



図９.アクシデント対応(ベンチ内)



図 10.アクシデント対応(ベンチ



図 11.合宿中の靴擦れ



図 12. 靴擦れに対する創

【帯同理学療法士の役割分担】

前回の世界大会同様に、帯同理学療法士 2 名の役割を明確にして行動しました。1 名は主に首脳陣への報告、連絡、相談、もう 1 名は主に選手に近い位置で活動し、役割を明確にすることで効率的に活動することが出来ました。コンディショニングは担当する選手を決めることはなく、帯同理学療法士のどちらでも対応できるように毎日コンディショニング終了後、帯同医師とともにミーティングを実施し、情報共有や活動の反省、翌日以降の活動方法、方向性の検討を行いました。合宿中選手自身が気になる部分があればテーピングなどで対応し、良い状態の維持回復に努めることや、首脳陣対応の理学療法士が登板前後に投手のコンデションチェックを欠かさず実施し、首脳陣へ情報提供を行っております。(図 13、14)



図 13. テーピング例

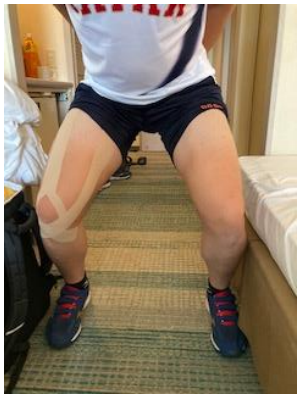


図 14. 動作の確認

【世界大会での理学療法士の活動】

国内合宿同様に朝食前の体重管理、疲労度、睡眠時間の聴取による体調管理（図 15、16）試合前・中のテーピング(図 17、18)、試合前のウォーミングアップ、練習や試合中におけるアクシデントへの対応(図 19、20)、投手や負傷者へのアイシング、全体クーリングダウン、個別クーリングダウン、宿舎でのコンディショニング（図 21)、などを行いました。特に体調管理面では、海外での大会と違い食事面での心配は少なく、食事量が落ちて体重が減るより、夕食の時間が遅く、体重が増える選手の心配がありました。大会期間中はナイターの試合が多く夕食が遅いので、試合中補食を購入し、試合に影響がないように調整しました。また、合宿中から試合に出場していない選手はあまりコンディショニングを受けに来ないように感じたため、朝の体重測定時に食事やコンディショニングなどについて選手に声掛けし、医師と共同で促していきました。その結果、今合宿・大会のコンディショニング・テーピング件数は例年より多くなったかと思います(表 1)。コンディションを整えるためにルーティンがある選手が多かったように思います。そのため、トレーニング、コンディショニングなどの選手の要望について、できる範囲で希望に応えてあげられるよう、様々な調整作業なども行いました。また、スコールなどの天候不良による長時間の試合中断に対する対応として、中断後のウォーミングアップではメンタル面も含めた配慮が必要でした。



図 15.体重測定



図 16.体調管理



図 17.選手に応じたテーピング



図 18.選手に応じたテーピングの貼付



図 19.デッドボー

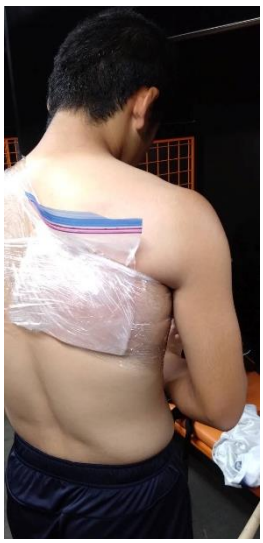


図 20.アイシング対応

【おわりに】

今大会も皆様の多大なるご協力、応援をいただきましたが、チーム目標であった優勝連覇を達成できず、世界の頂点にあと一歩とどかなかった悔しさと、選手たちと共に戦えた誇りを胸に、今後も理学療法士として活動させていただきます。今回の帯同経験で選手、首脳陣、連戦の過酷さなどから多くの事を学ばせていただきました。

最後になりましたが、今回の帯同に御支援頂いたアスリートケアの皆様、日本高等学校野球連盟、また大会前合宿・世界大会中にお世話になったスタッフの皆様に、心より御礼申し上げます。

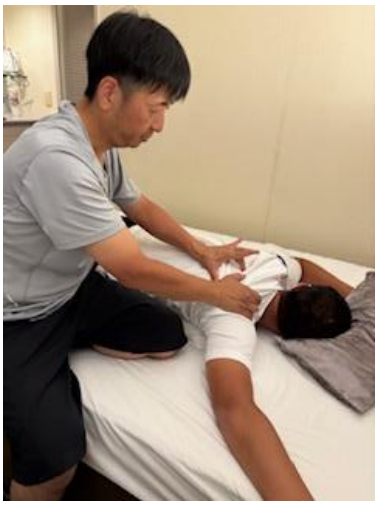


図 21.宿舎でのコンディショニング



図 22.結果は準優勝

表１．コンディショニング・処置等の件数

サポート内容	合宿中のサポート件数	大会期間中のサポート件数	合　計
コンディショニング	105回	107回	212件
テーピング	46回	117回	163件
投手アイシング	44回	30回	74件
熱中症様症状	1回	0回	1件
打撲対応	4回	20回	21件
擦過傷対応	7回	10回	17件
靴ずれ対応	42回	36回	78件
動作指導	8回	1回	9件



図 23.大会後の集合写真

運動器エコーの活用をもっと身近に

SIGMAX

汎用超音波画像診断装置

ポケットエコー miruco CL5



特設サイトはこちら ▼

製品詳細や描出画像例などを
ご覧いただけます

描出画像例



大腿四頭筋



棘上筋腱

導入しやすい価格帯で
診療に必要な
基本機能を搭載した
ケーブルレスポケットエコー

495,000円(税込)

■販売名 ポケットエコー miruco CL5　■医療機器分類 管理医療機器
■一般的名称 汎用超音波画像診断装置　■特定保守管理医療機器 該当
■類別 理学診療用器具　■医療機器認証番号 306AFBZX00100000

いつでも、どこでも、すぐに診る

▶ **カラードプラ/パワードプラ機能搭載**



・カラードプラ使用イメージ（頸動脈）

▶ **デュアルプローブ搭載（リニア・コンベックス）のケーブルレス仕様**





▶ **連続動作時間 2時間**

・エコーガイド下穿刺
・スポーツ現場
・リハビリテーション
などの活用にオススメ！

製造販売業者
SIGMAX 日本シグマックス株式会社

本社：〒160-0023　東京都新宿区西新宿 1-24-1
お客様窓口：TEL.0800-222-6122（通話料無料）
受付時間：9時～17時（平日）※土日、祝日、年末年始を除く
日本シグマックスのホームページ　https://sigmax-med.jp/

福祉機器・医療機器の専門商社

福祉機器・介護用品・医療機器をはじめ、オフィス機器、家具、厨房機器等、施設にかかるトータルコンサルティングを行います。

MERECO
— Medical Research Consultant —

〒530-0041
大阪市北区天神橋２丁目北１番21号
（八千代ビル東館４階）

株式会社メリコ

06-6357-5350
info@mereco.co.jp
http://www.mereco.co.jp